明治卅六年四月二日第三種郵便物認可　每月一回二日發行

家庭雜誌

第三卷

第壹號

明治三十八年一月二日發行

由分社

東京市麴町區中六番町十番地

●本誌定價及廣告料

一部	一ヶ月	六ヶ月	一ヶ年	全國
金六錢	金六錢	金卅二錢	金六十錢	無遞送料

廣告料——特別一頁七圓、普通一頁五圓

注意

一、本誌は毎月一回(二日)發行とす。
一、本誌の購讀料は小爲替を以て御遞送の事。但し郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事。
一、購讀者は住所姓名を詳細に記して申込まれたし。又轉所の際は新舊の宿所共併せて御通知あるべし。
一、爲替振込局並に受取人は無指定にてもよろし。

明治三十七年十二月廿九日印刷
明治三十八年一月二日發行

發行兼編輯人 東京府豐多摩郡千駄谷村字原宿百九十一番地 西村惠治郎
印刷人 東京市京橋區日吉町十番地 中村彌助

發行所 東京麴町區中六番町十番地 由分社

大賣捌所 上田屋 良明堂 東京堂 東海堂

家庭雜誌 合本第二卷

例に依て第貳巻十二冊の合本

壹冊　價七十錢　郵税十錢

を調製しました。總クロースで頗る美麗、且つ堅固に製本してありますから、永く座右に備へて愛玩するに宜しく、又家庭間の贈り物に致すにも、極めて妙であらうかと思ひます。

注意（右合本の御注文には當分の内郵税を當方にて負擔致します）

由分社廣告

由分社取次書籍目錄

（本誌の讀者に限り左の書籍の御注文には郵税不要）

家庭の新風味　堺枯川著　全六冊合本　定價壹圓　郵税八錢

▲第一冊家庭の組織　▲第二冊家庭の事務　▲第三冊家庭の文學　▲第四冊家庭の親愛　▲第五冊家庭の和樂　▲第六冊家庭の教育

家庭夜話　堺枯川編輯　全三冊合本　定價壹圓　郵税十錢

▲第一冊子孫繁昌の話（ゾラ著）　▲第二冊質素節儉の話（コールドスミス著）　▲第三冊仁慈博愛の話（ストー夫人著）

（各冊三十五錢郵税四錢）

小説 火の柱　木下尙江著　價三十五錢　郵税六錢

妾の半生涯　福田（舊姓景山）英子著　定價三十五錢　郵税六錢

青年と生存競爭　安藤兎毛喜著　定價二十錢　郵税二錢

（本書に限り定價の二割引）



謹賀新年

登録商標

五二會品評會功勞銅牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ウワイオレット煉製
錫蓋附乳白硝子器入
壽美禮おしろい

●壽美禮おしろい



●壽美禮おしろい　ねり製　定價〔大罎二十錢　小罎十二錢〕

ヴワイオレット水製　水製　定價〔大罎二十五錢　中罎十五錢　小罎十錢〕

錫栓附乳白硝子壜入



すみれ白粉は　歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成蹟體等を以て配劑しあるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顔肌等の色を白變せしめきめをこまやかに、にきび、そばかすあせも等を生せす御肌へを清々しく天然の色白きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會祝席雜踏の場所に臨て諸々の惡臭を退け不淨を拂ひ心氣を清爽快活ならしめ衛生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

●皮膚艶白劑壽美禮あらい粉

●綠、藍、紅彩蝶番ひボックス入　三錢
鑵詰　六錢五厘　袋入　壹錢

西洋色白くなるあらひ劑

登録商標

SUMIRE.
Washing Powder

壽美禮あらい粉



●弊舖製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を清々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

●常に髮洗ひに用ひ給へば毛の拔る病を豫防し毛のくせを直し美くして艶を出し髮のねばりを取り油あかふけ等を生せず又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

●使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は温湯に溶し又はぬかに混せ入浴の際用ふるを良とす

製造本舖　東京東兩國　元町兩國橋通り

伊勢吉壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

『晝飯のまどひ』に題す

片山里の百性家、今しも古い大きな食卓の上では、一家族の樂しい晝飯が始まつた。脊の高い教會の建物の見える南向の窓からは、小六月の温い日光が室内に流れ込み、一座の人の顏を等分に照して居るのである。窓際には女の子の編さした赤い毛糸が、翠色の盆栽と打並で、煤びた食堂に得ならぬ趣きを添て居る。

朝早くから馬と一所に野良へ出て居た主人は、丁度靴を脱いで眞暗な裏口からお家の方へ這入らうとするところ。家族の中の一人である馬吉は隨分と馴れたもので、例時の如く歸つて來ると戸口からぬつと斗り首を出す。子供達の**オカア**さんは待つて居たと云ふやうに笑顏を作り『お丶馬吉か、疲れたらうねえ。さあ御馳走を上げるよ。』と大きな一片の肉を口元へ押付けて遣る。すると今迄辛抱して居た「赤」(犬)はそれを見て忽ち鼻で鳴出した。『クン、クン、奥樣僕にも頂戴な……』其膝に手を掛け、鼻尖をうごめかして只管友達と同じ配分を奥樣に哀願するのである。同情の深い一番の姉さんは此時ナイフを取る手を休めて、『さあ「赤」や、此方へお出な、妾が好いものをあげるからさ。』と、頻りに「赤」を呼んで居る。中の弟は遊戲でお腹が空いたのらしい。すゞ默つて唯々詰込一方に忙しいが、何時も孫の世話ばかり云ひ付かるお婆さんは、なかなかフォークを取る所の暇がない。相變らず可愛い孫の爲めならばとも云ひたげに、先程から「パン」切にかゝり上つて居る。其間に可笑しいのは小さな末の子で、他の手を借らずに牛乳を飲んで居る處は、丸で食卓の端にぶら下つて居るかの見得がある。

如何に平和なる晝飯、頓て主人も席に着くだらう。日々の勞働で鍛えた其手で、妻の磨いたフォークをぐつと取上げた時、彼は果してどんな幸福を心の奥に感・ずるであらうか。

悔の正月

『早くお正月が來れば好いなあ。』

これ正しく正月の樂しさを知る者の聲である。

年の暮になると、何處の家でも皆な忙しい。平生に怠けて置けば、此場合にそれ丈苦しい思ひをせねばならぬ。夫は外に出で丶日々の勤勞に倍の力を濺ぎ、妻は老人と共に家に在つて迎年の工面や準備に維れ日も足らぬ。例令其日暮しの辛さを知らぬ、華族の家であるにしても、家事の萬端をあづかる家扶や召使の身には、矢張用事に紛れて一寸の暇もないのである。

此多忙なる、繁務なる、若くば心配多さ時に當つて、獨り治外法權の境地に立つて居るのは小兒の階級である。彼等は何故にしかく正月の來るのが待遠いのであらうか。蓋し彼等は林檎色の頰と柔かく黑き髮の毛を持つて居る、かの一種のアナクレオンか。彼等の心は快樂と云ふ事より外に何物も知ぬ。敢て越し方の如何を顧るの要もない。唯行く手／＼の道に咲く容貌好き花の色を尋ね、其薫りに醉てさへ居れば好いのである。

（二）

飜つて思ふ。予は今果して、曾て慈母の膝に依りて「お正月」を待詫びしと同じ心を以て、新玉の麗しき初空を迎へ得るであらうか。予は予の甲斐なき馬齢を加ふる毎に、胸の平和の攪亂されぬ事とてはない。『あゝまた新年が來た。』『段々と年を取る斗りで情けない。』

この述懷の中、正月の樂しさが何處にか微いて居やう。予の正月は嘆息の正月である。愛惜づかしの正月である。頓て絶望の暗黑の正月、最後に、後悔の正月。世の中にこれ程又憐むべき事はないであらう。成程此悔ひと云ふ心は、神が人間に與へた中の最も貴とい藥で、用うる人の勝手次第に任してはあらうけれど、それは惰慢の予の如きものが考がへる程に輕々しい性質のものではない。過去に於ける悔ひの心は畢竟神の憐みで、それが爲暫時心の安靜を得たからとて、斷じて人間の名譽ではない。

予は一昨年の正月に悔ひたのと同じ事を、昨年の正月に至つて事新しく繰返て悔ひたのを覺えて居る。そ

うして、今年の元朝に臨んで、又候同じ後悔の念が予の心頭を拂へども〳〵終に去らぬのである。今予が私かに過去の一年を顧るに、日常の些事に於ても、白狀したい非點が頗る多い。予が曾て予の意思を試さんとて企てた離床時間の約束は、果して幾日間實行されたのであつたか。又其際、食事前の散歩を思ひ立ち、路の小草を踏み別けつゝ明方の清らかな空氣に一日の精力を養つたのは、果して幾朝が程であつたらうか。夜々の勉學に睡魔の犯す時は早速戸外の大氣に觸れて神經を驚かすべしと心に誓ひ乍ら、いざとなつて、「今夜は特別だ」とて狐鼠々々と臥床に入込んだのは幾度であつたか。月の初め、週の初めに於て豫め定めた書物を、終り迄時日を違へずに讀み了へた例しはあるか。更に家庭の人としては、妻に對して幾度び澁き顏を作つたであらう。不平の色を見せた事も亦幾そ度！　こゝに他人の上に關しては、予自身頗る罪の淺からぬを覺悟するのである。其日に書くべき筈の返書を二日三日と延ばしつゝ、終に「多忙」の一語を以て其怠惰の罪の蔽ひ隱した事も度々であつた。或は些細な困難、かりそめの病氣にも打負けて、友との約束を果さずに了つた事もないではない。特に最も恐るべきはある難關に處した時の虚言や遁辭、若くば故なくして他人の精力を盜むと云ふやうな卑劣な行爲が、眞に毫末もないと云ひ得る事が出來やうか。予は予の良心に照らされて、私かに忸怩たらざるを得ぬのである。

予は此上にも恥を曝して、愛すべき社會に對する自己の善意と力の効果を云々しやうとするの太膽がない。予の過去の生涯は畢竟するに無價値なる生涯であつた。

吁々悔ひの正月。繰返して云ふが、悔ひの情は人間に寄せたる神の最後の憐愍である。予は今貧しき農夫の位地に下る事を悲まぬ。若しも過ぐる一歳の越方を回想して、そこに一つの悔恨がないならば。予は元朝の廟堂に立つ大臣や宰相やの身分を羨まぬ。悔ひの念ひは直に胸に迫るであらう。

「早くお正月になれば好いなあ。」

眞に兒童の聲は天使の聲である。其樂しき調子其煩ひなき音調。予は此等の可愛き仲間に打交り、聊か悔ひの思なき、健氣なる正大なるわが正月を悠々として迎へんことを理想とするものである。

●家庭改良の實行

正月は兎に角暇な時であります上に、近所合壁、知合の家と家とが、最も繁く澤山に顔を合はす時であります。記者が今世の家庭の主人方並びに主婦方にお薦め致したいのは丁度斯う云ふ機會を利用して、家庭の改良方に充分の相談をとげられ、更に其小なる範圍内で實行なされては如何であらうか。と云ふ事です。

平常特に會を設けて寄集らうと云ふのは、餘程の熱心がない以上、先づ六ケ敷い問相談で、別けても出嫁の奥様などには到底望み難い事であります。

さて、こゝに改良方と申しても驚くに足らぬ。無論小なる範圍でやる事であるから、何でも小さな處から始めることが却て効果が見易いと思ひます。假令へて見れば、主人方は訪問時間を嚴定する事、用事がなければ訪はぬこと。其代り月に一二回廻り合せで茶話會を開く事。主婦の側では、主人の我儘に對しては強硬の手段を取ることに同盟すること。毎日の感想を控え置き、ある時日を定めてお互に研究し合ふこと。これは一例に過ぎぬが、こゝらから手を着けて行くならば、左程に困難な事はなからうかと思ふ。此際切に其實行を祈ります。

●坂雄の手紙

今日は何だか曇つた厭な日だねえ。また雪でも降るのではないか知ら。昨日お茶の水橋で幾さんの後姿を折よく見た。僕は聲を掛けやうと幾度後戻りしたか知れないけれども、同伴者が大分あるやうだつたから、人中で赤い顔させるのも氣の毒と、辛抱して電車に乗つたの。あの模様の袂布は幾さんに大層能く映つて居るやうだが、もう少し海老茶を高くはいたらどうか。下から赤い靴下の見えるのが却つて趣きがあるだらう。

一寸注意するがね、なるべく身體はしやんとして、胸を張出すやうになさいよ。仰向いて居るのは能くないの。十五六と云ふ幾さん時分が一番の發達の速かな時代だから、延びられる丈延びて置くさ。尤も延びると云つても、ひよろ長い幽靈のやうでも困るから、そこは精々氣を付けて活潑に動作をなし、筋肉の運動を怠らぬやうにして下さい。姿の好いと云ふのはしやな〳〵したのぢやない。活々として身體が申分なく發達して居るのを云ふのです。つまらぬ體育の講義をして、飛んだ御迷惑！併し戯談ぢやない。眞面目ですよ。

何時か話して居たシオンの花簪、とう〳〵挿したのねえ。好く似合つて居たよ。僕は今日幾さんが好きだと云つた、紫茶のリボンの簪と、それからもうないと云つて居た、カスメチックとを小包で送る。餘り上物ではないけれど使つて見て下さい。さよなら……おつと、幾さん！二人で獨立の生活が出來るやうになるのはまあ何時頃だらうねえ？

……日夜、學課を卒へてねがけに書く

幾子さま

坂雄より

愛と働

私は茲に、明治卅八の新しき年を迎ふるに當りて、聊か愛と働との福音を述べて、兄姉が將來の希望にあやかりたいと思ひます。

てき生

透谷子は嘗て、人の世に生るや、一の約束を抱きて來れり、人に愛せらるゝ事と人を愛する事之なりと云はれましたが、愛と働とは實に人生の一大事實であります、愛は他と我とを結び付くる唯一の連鎖で、集團性は、進化論者が何と云はうか、慥に愛心の發動であります。隣人を愛せよとは基督教の最大の誡なると共に、慈悲は又釋迦佛の教であります。假令われ諸の人の言および天使の言を語るとも、若し愛なくば鳴銅や響鈸の如しとの哥林多前書の十三章は、御存じの如く偉大なる愛の頌歌ではありませぬか、天國は愛の國であります。怨には呪咀あり、愛には祝福あり、若し又、各人互に相愛し、相樂んで、我は他の爲めに、他は我の爲めに働く所で、社會圓滿の理想は實現せらるゝと云ふもの、古來より苟くも眞の人傑の爲す所は皆こゝを達し得べく努力したのに外ならないのです。

宗教とは一體何でありましようか、多少の議論はあるとしても、簡單に申せば、神に對する愛の教に過ぎぬのであります。この小なる我を大なる神の内に沒して、茲に精靈の融合を認め得ることゝなるのが即ち愛の教で、宗教に外ならぬのです。げに愛の最高調は父なる神を認むるにありて、父なる神を信仰するより來るので、この愛と信とによりて合一の確めは即ち望であります。イエスがユデヤ教に對する新見識はこれで、又ダンテ神曲の思想も實に茲にあるのです。我々は父母を愛して茲に父母を知り我々は人類を愛して茲に人類を知り、我々は神を愛して茲に神を知り、かくて萬有は皆わが親しき一物となるのであります。

されば、若しわが諸君の中で、どなたか宇宙人生に對する疑惑を抱いて居る方があつたとしたならば、その解答は必ずしもこれを科學に求むるを要しませぬ。これを哲學に求むるを要しませぬ。直ちにこれを愛に求めなさい、諸君が父母兄弟と相親愛して居る時に當

りて、宇宙人生の眞義は乃ち其處に遺憾なく解釋せられてあるのです。はかなき蝴蝶がはかなき花に、而も靜かに眠むるの時、茲に偉大なる人生の教訓はありませぬか。さて、兄弟を愛するの心はやがて神を愛するの心、基督も、汝等兄弟を愛せずしていかで神を愛するを得んやと云はれました。さらば、兄弟を愛し、神を愛して、其所にドーして宇宙人生の疑惑はありましよう。暗は光りのない時のみに限ります――ダガ、今の僞りの世には、神を愛すと云つてその隣人を愛せぬ人の多いのは、誠に遺憾の次第ではありませぬか。

更にさかのぼつて見まするに、愛は犧牲を意味します。友の爲めにその生命を捨つるより大なる愛はなしとは基督の仰せで御座います。犧牲なきの愛はこれは僞りの愛と申します。父母がその子を愛するの原理はその犧牲にあります。基督が人類に對する愛はその十字架にありませぬか。古來の哲人が身を眞理に犧牲にし、志士が身を國事に犧牲にしたと云ふのは、皆その眞理を愛し、その國家を愛するの一念慮にきざしたのではありませぬか。君子は身を殺して仁を爲すことあり云へましよう。仁は愛であります。殺身は犧牲であります。實に人間の天職とは、かの上帝とこの人類との愛の爲めに身をさゝげて働くにあるのであります。

然り、働くにあるのであります。ゲーテはこれをタートと云いました、だが、私は働きそのものは自らでは必ずしも尊いと云ふ所以はないと思ひます。一概に勞働は神聖と云ひますが、尤も沒理想の見界では活動は直ちに人生の事實であるかも知れませぬが、只だそれは働かぬ貴人より働く平民は尊いと云ふだけで、人生が無意味ならざる以上、無意味なる活動は又無意味たるに過ぎないのです。乃ち上帝と人類との愛の爲めに身をさゝげて働くあるにあらざれば、その働きはこれは當然無意味と云はなければならぬのです。されば、愛は花であります、働きは實であります。花なくていかで實は結ばれましよう。實のなき花は又虛ではありませぬか。故に曰く、愛と働とは人生の一大事實であると。

家庭新年の植物

二葉生

是れは皆家庭の植物に關する迷信の紹介に過ぎませぬ。けれど、新家庭に要する新年の植物を選ぶ上に、是等の緣由を知つて置くは、萬更無用の事でなからうと思ひます。

○所謂蓬萊祝ふ

蓬萊は島の名でありまして、此處の果物を食しますと、不老不死に到るそうですから、昔は年始に「命遠久」と云ひ、三方に種々の物を積み重ね、蓬萊と名けて祝ひました。其の積み重ねられたものは、凡そ左のやうな物と、緣起と迷信とでありました。

▲神馬藻。神功皇后、異國を攻められた時、船中に秣がありませんでしたから、海中の藻を取つて馬を牧れた。其の藻を神馬藻と名付け、其の名によつて年德神の馬によそほひて是れを飾ります。

和訓と云ふ書物に穗俵と書き、其の穗も俵も芽出度きものだから、是を新年に用ゆるのだと書いてあります。俗間ではホンダワラと申し、學問上では褐色藻と云ふ二百餘種の大部類の海藻を指す漠とした名稱であります。

△ほだわらや祝儀表する宿の春　（韶　元）

▲橘。冬も綠で其色褪りませず、實が眞紅だから、そこに緣起をつけて祝ふのだそうです。昔、諸兄公と云ふ人が始めて此の橘と云ふ姓をつけたと申します。

△橘はきみよき年の飾かな　（安　正）

▲野老。老の字に緣起をつけて用ひましたとか。

▲榧。是れを食へば壽命が延ぶると申します。

▲橙。實を結べば七八年落ちにずそこで代々つゝくといふ意で。

▲搗栗。搗を勝に代へ、萬事に勝を意味させて。

▲梅干。梅實珠と云ふ玉の心で……。

右の外、みかん、柑子、ころがき、昆布（のし）拙、串柿等をも用ひたそうです。

○年頭植物のいろ〳〵

▲門松。松は千歳を契り、竹は萬代を契るものゆゑ、年始の祝に用ゆるとは、一條禪閤と云ふ古人の說。又、

松は十返と云つて、百年に一度咲いても葉も落ちず、春のやうであるから、千年の齢あるとて年の始めに用ゐるとも申します。尚、昔は藁で小さい畚のやうなものを製へ、藁盆子と云つて、門松に結び添へました。

△二見からまき繪や續く門の松　（參　林）

▲餝炭。炭は土中に埋もれて久しく經つも腐りませんから、是を屋内に立てますれば邪惡を拂い避くと、昔の本草家が申しました。それで餝炭と稱へ、眞黑の木炭を新年に祝ひました。

△元日の炭とり十の指くろし　（其　角）

▲注連餝。是は地方によつて、今も盛んに餝ります。其の意は、

△飾りわら春の門田の稻葉哉　（別　推）

▲齒朶。齒はよはひに讀み、朶はいだに讀む。即ち齢長く枝のぶると云ふ意で是れを用ふるのだそうです。その上、此植物は雪霜にも凋まず緑濃きものですから、新年の祝ひとして鏡餅と一つしよに餝ります。又の名を裏白、やまくさ等と稱へます。

▲杠。親子草、しわね草とも云ひまして、代々へ讓り、子孫長く繁榮すると云ふ、所謂目出度い義と意味取つて、橙と並べ用ゐます。併し代々ゆづるとは其の間に「死」と云ふ意味もあるので、强慾な死の字嫌ひの人は是れを忌みましたれど、今では習慣となつて、別に異樣に思はれません、

△ゆづりはや口にふくみて歲はじめ　（其　角）

▲雜煮餅の中へ入れる植物、是は所に依つて異ひますが、主に芋頭、大根、芋の子、かち栗、昆布、うきな、午蒡などであります。

▲昆布祝ふ。結びよろこんぶと云ふ心で祝ふので。

▲芋頭。萬事の司、即ち頭になる心で祝ふのだそうです。又、頭と云ふ字は、大學の頭、藏人の頭など、位ある人の名とする故、元日に祝ふのだとも申します。

▲開豆。豆を水煮にし、大根を酢味噌にあへて、雜煮餅祝ふ傍に盛り据へるを開豆と呼ぶのです。つまり開くと云ふ字は祝の言葉であり、豆は、健康に通ずるのだそうで。

▲開午蒡。煮た午蒡を、口の開いた皿に盛り、斯く呼ぶのだそうです。開豆と同じ心で祝ふと申します。

▲加賀御草。昔、大内にて餅の上に置く大根をカヾミグサと稱へたそうです。

さき草の中にも早きかゞみぐさ
やがてみつぎにそなへつる哉　（夫　木）

▲葩煎賣。葩煎とは、籾、玉蜀黍などを炒りますと、パツリ〳〵と小音をたてゝ、蕾が開くやうに笑み膨れて、白く奇しく花のやうになるものを云ふのだそうです。昔は是れを元日に、家内へまきましたから、それを「ハゼ」うりと呼んだのであります。

▲幸木。幸籠。木の小枝を折つて、夫れに魚鳥菜果を懸けて、竈の上に飾るのを幸木と云ひ、筑紫には今でもするそうです。そうしてそれ等を總稱して幸籠と云ひますとか。

▲鬼打木。大賀玉の木とも申します。門松の影の木を云ふのだそうです。それは年木と云つて、正月の始めに瑕のない木を採り、末に葉を殘し、門に寄せかけて置くのであります。鬼打ち拂ふ木と云ふ心で用ゐるのであるとか。

▲稲積む。寝るを稲にとり、積むは樂しきを積み重ねる心で、元日に晝寝するのを「稲積む」と申します。一説には正月三ケ日のことを云のだとも云てあります。

△稲積や秋の青葉を花の春　（千　問）

▲削花。柳の枝を削りかけて、門戸にさして置くのを云ふのです。柳は陽木で、祝ひ事、まじなひ事に用ゆるから其の心で斯くするのだと申します。

▲小松引。昔新年初子の日、野邊に出て小松を引き、遊んだことがありまして、是れが朱雀院の頃から初まつたのだと云ひます。當時、北野紫野と云ふ所へ陛下が御幸になつて、小松を延いて此の日を祝はれたと、古事根元と云ふ書に出て居りました。その由來は、子の方角は北でありまして、所謂北洲千年の壽をかたどつたのだそうです。それに松も千年の壽ある目出度いもの故、是れを引くのでありますとか。併し茲に、特に「小松引」とありますのは、小松即ち若松のことゝて、

千年の壽ある上、その行末榮ゆる心もとつて、喧だわけもなく目出度がるのだそうです。

倚二松根一以摩レ腰千年翠滿レ手　折二梅花一挿レ
頭二月雪落レ衣

▲めど（玉箒）。メドと稱へる草に、小松を採り添へて、家内を掃き初むることを云ふのであります。

○草木に關する元旦の故事

▲仙木。桃の木を削り符を書きつけて「仙木」と呼びました。百鬼是れに恐ると云ひ、元日に立てゝ邪氣を防ぐに用ひられたのです（日本歳時記に委しくあります）

▲五辛盤。生菜春盤、又は菜盤とも云ひ、松、柏、椒花、菜、大根、芹等の生のもの及び餅などを一つの盤に盛り、相贈るのを名付けたものです。尚、本草綱目と云ふ書物に『葱、蒜、蓼、蒿、芥等を盛り饌ふるを五辛盤と云ふ、迎春の義なり』と書いてあります。

▲椒栢酒。椒酒、椒觴、などゝも云ひます。椒は玉衡星の精で是を服すると、屠蘇酒を用ゆるに等しいそうで、其の能により斯く稱へるのでありますとか。

▲神荼鬱壘。漢書に『東海の度朔に桃の樹あり、大さ三千里、東北に二神あり神荼鬱壘と云ふ、此の神百鬼を喰ふとなり』

▲粉茘枝。正月米の粉を以て、茘枝の形をつくり「粉茘枝」と稱へて食ふのを云ふたです。

▲七松を折る。『歳の初めに松の枝を折る、男は七つ女は二つ、藥として是を呑むべし』と薰勸と云ふ書物に見えて居るが、どうも要領を得られません。

○草木に關する元旦の妙術

▲年中病を除く。去冬、山椒を酒に浸し置き、今朝丑の時より前に、赤小豆七粒を右の酒で呑みますと、年中病を除かるゝと申します。

▲蒼朮。今日蒼朮を燒けば、年中邪氣を除くと申します。或は之を煎湯として呑むもよいそうです。

▲枸杞と不老法。今日枸杞を湯に入れて、浴みすれば、人をして光澤あらしめ、病まず老ひぬと云ふからだにするそうです。

▲麻にて瘟疫を避く。麻の實を七粒、赤小豆七粒を井の中へ入るれば、病難を除くと云ふ。

▲樹木の蟲退治。今日鶏鳴の頃、火を點じ、樹木を照らし見るべし、此の時未だ蟲つかずとも、腐り、或は腐りかけた枝葉があれば、直ぐ取り除き置くと、年中樹木に蟲がつかぬ、と眞面白くさつて博物筌と云ふ書物に書いてありました。

又、此の時、松火で樹木の上下を照らした丈けで、蟲が妙に着かぬとも云ひます。

▲樹の實を多く結らす法。元旦五更の時、早く斧を持つて菓の木を叩き、或は傷けると其の年は、菓實を結ぶことが多いと申します。

越中の國の山家のある地方では、十年前頃まで、正月の十五日の朝食後、赤小豆粥を椀に盛り、それを左手に、右手には山刀を持ち菓木の下に至り『結るか結らぬか物云ひし』と怒鳴りつけますと、先きに一人の小供が上へ昇り居り『結りまアーす〱かんにん〱……』と答へます。そこで件の山刀で傷をつけ、そこへ椀の中の赤小豆粥を食はせるのであります。それも矢張結果が多いと云ふ迷信に基くので。

▲赤小豆で除病。新しい布の嚢に赤小豆を盛つて、井の中に置き、三日目にとり出し、男は七粒女は十四粒づゝ呑みさすと、本年中は無病だそうです。

●二十世紀のお轉婆より

兄さんのお手紙、今日の三時頃に屆いてよ。しみ〴〵と味つて讀んだの。小包はまだ來ませんが、今晩あたりは着くでせう。紫茶のリボン、妾何より嬉しいわ。

此頃はねえ、寄宿舍の規則と生徒の取締りが嚴しくなつて、ほんとに厭になつて了つてよ。現に兄さんから戴いた手紙で、一悶着起つたの。男から來る手紙は一切生徒の手に渡さないとガツてね、舍監がどうしても許さないのでせう。だから、妾腹が立つたからかう云つて遣つたの●「男と交際するのが何故惡いのですか。妾は二十世紀の女子ですよ。昔時の教育を受けて居るのぢや御座いません。」

すると舍監は妾の顔をじつと見て、「別に惡いと云ふのぢやないですが、風儀を亂して困ります。近頃は女學生の間に惡い評判が立つて居るから。」と、つまらない事をさも大袈裟に云ふのです。妾は擲さうかと思ひましたれど、餘り馬鹿々々しいから、「さうですか、其様に御心配なさるなら、どうぞ此手紙の文句を見て下さい。」と云ひ〱、封を切つて押付けて遣つたの。舍監がそれを讀み了ると、「これは何方です。」と聞きます故、「それは妾の未來の郎人です。ホームを持つ迄かうやつて互に離れて、共々に心や性情を磨合つて居るのです。」と云つたら、「どうもお轉婆だなあ。」と云ひたげに到頭要領を得ず了ひでした。併し妾はこれで心が清々してよ。若し後から何とか云つて來たら、妾は直に退校して了ふわ。……序に、二三日の中に一度逢ひませうねえ。戀しくなつたからよ。

その夜　二十世紀のお轉婆より

坂雄さま

鮭の料理

緑亭主人

鮭は洋食に使ふ魚類の中の主なるものであつて、其料理法も數ありますが、今生鮭と鹽鮭及び鑵詰の調理法を少しく玆に記します。

一、ボイル・サーマン。これは生鮭の身を鹽ゆでにしたものです。先づ鱗と鰭を取り腹を開きて其中をよく洗ひ、胴の眞中のあたりから人數に應して一切れを運び、別に鍋へ此魚を十分浸すだけの水を入れ、一升につき一大匙の鹽を加へ、煮立つて來た時靜に魚を入れて煮ます。魚を鍋へ入れて其上から熱湯を注ぐか、又あまり烈しい火にかけて沸しますと、皮が剝げたり、身がこはれて見苦しくなります。魚の中まで十分煮えた頃之を大きな皿へ取り、ダッチ・ソースか又はアンチョヴィ・ソースを添へて食膳に出します。

(注意)ボイル・サーマンの殘りはブロイルやフライの殘りと同じく、コールド・サーマンとして他の料理の

材料となり、又此魚を煮た汁もスープなどを拵へるのに甚だ肝要なもの故、大切に保存する事です。

◎ダッチ・ソースの製法。小さいソース鍋へバター一大匙と麥粉一小匙を入れ、火にかけて麥粉の煮えるまでよくかきませ、之へ水二大匙酢二大匙を徐々に加へ鹽と胡椒にて味をつけ、別によく解きたる卵の黄身二箇を加へ、弱き火の上で少しく濃くなるまでかきませ、決して煮過ぎてはいけません。終りにレモンの汁半分を搾り込んでもよろしい。

◎アンチョヴィ・ソースの製法。麥粉一大匙とバター一大匙とをソース鍋に入れ、少しく茶色になるまで炙りこがし、之へ魚の煮汁か又は肉の汁を少しづヽ加へて濃くし、アンチョヴィのエッセンス一小匙と鹽胡椒とで味をつけます。此二つは魚にかけるに最も適當なソースです。

一、サーマン・スープ。コールド・サーマンの內別によき身を少しく貯へ置き、其骨や頭や皮を鍋に入れ、之へボイル・サーマンの汁或は外の魚の汁を加へて二

三十分間煮出し、其滓を去りて汁と同量の牛乳を加へ、鹽と胡椒で味をつけ、麥粉を加へて濃くし、前に貯へて置いたサーマンの身を小片にして之に入れます。

◎すべて牛乳をスープや肉の料理へ入れるには、別に牛乳だけ温めて置き之を混じてから餘り沸さぬ樣にせねばなりません。

一、フライ・サーマン。　生鮭を六七分の厚に切り、鹽と胡椒をふりかけ、玉子とパン粉をつけ、よく油で揚げてソースをかけて出します。（第二卷第七號參照）

一、ブロイル・サーマン。　前と同じ樣に切り、鹽と胡椒で味をつけ、金串へさすか或は金網の上へ載せ、強き炭火にかけて兩面がよき色になる迄燒き、バタをぬり、ソースかレモン汁をかけて出します。

◎私の國（紀伊）ではレモンの代りに、青蜜柑や、橙の酢を用ゐます。

一、サーマン・ケーキ。　コールド・サーマンの身を擦りつぶしたもの一分と、マッシ・ポテト（馬鈴藷をゆで、つぶしたもの）二分とをよく交せ、鹽と胡椒で味をつけ、大きな饅頭の形に造り、牛の脂肪かバタ少しを以てフライ鍋で燒き、ソースをかけて出します。これは鹽鮭の煮たのでゝも出來ます。

◎すべて、鹽魚は生魚に比べて滋養分の少いものですか、之を適當に調理すれば、隨分味がよくなり、強ち捨てたものではありません。之を鹽出しするには其大さと乾燥の度にもよりますが、餘り多くの水に長時間浸して置けば、唯に鹽が出過ぎるのみならず、其味も溶け出て行きます。皮のついた身は、皮の方を上にして置かねば鹽がよく出ません。鹽鮭は先づよく洗ひ、二十四時間位水に浸し、之を煮るには成るべく大きな切れのまゝ鍋に入れ、一時間以上もとろ火にかけて置きます。これはコールド・サーマンとして貯へ置き、種々の料理に使はれます。

一、サーマン・サラド。　コールド・サーマンと馬鈴藷の煮たもの等分を適宜の大さに切り、葱を少々之へ刻みこみ、サラド・ソースをかけます。

◎サラド・ソースの製法は第二卷第十一號に詳しく

記して置きましたが、其内にも簡易なものは、鷄卵一箇を二十分間煮ぬき、其黄味をよくすりつぶし、それへバタ半食匙、煉芥子、砂糖、鹽、胡椒を加へ、充分混和してから酢四大匙を徐々に加へるのです。

一、ベーキ・サーマン。　生鮭の身を一人分づゝ適宜の大さに切り、鹽と胡椒をふりかけ置き、別にベーキ皿へバタを布き、パン粉をふりかけ、其上へ鮭を並べ、細かく刻みたる葱と蕃茄の汁をかけ（これは畧してもよし）、又パン粉とバタを上に置き、魚の煮汁か肉の汁を少しく加へ二十分間オヴンに入れて燒きます。

一、サーマン・トース。　バタ一大匙と麥粉二大匙を小さきソース鍋にてとかし、牛乳二茶碗を少しづゝ加へてよくかきまぜ、之へコールド・サーマンを細かくつぶしたもの一茶碗ばかりを加へ、鹽と胡椒で味をつけ、終りに鷄卵一箇を割り込み、充分かきまぜ良く燒きたるトース（燒きパン）の上へひろげます。

◎澱粉は四百〇一度の熱に逢へばデキストリンに變じ、澱粉よりも遙かに消化し易きものと成ります。これ則ちトースが生パンよりも虚弱なる胃に適するわけです。故にトースを作るには成るべく新しきパンを用ゐず、二三日經過して幾分か乾いたものを選び、啻に上皮のみならず中までもトースせられねばなりません。

一、カレー・サーマン。　球葱を細かく刻み、少しく色のつくまでバタにていため、カレー粉一大匙を加へて尚暫らく炙り、これへ魚の煮汁か又は肉汁四茶碗計りを入れ、別に貯へたるコールド・サーマーの小片一茶碗と適宜の鹽を加へ、麥粉を以て其汁を濃く爲し、飯に添へて出します。

一、ピグル・サーマン。　コールド・サーマンを適宜の大さに切り、別にボイル・サーマンの汁と酢を等分に合し、胡椒の實、オールスパイス、丁子五六本、生葱少々、蒜一小片、及び鹽適宜を壺に入れ、十分間計り煮てその冷却した時、前の鮭の身を漬し置き、二十四時間の後食膳に出します。これは涼しい時候ならば一週間以上も保存が出來るものです。

◎右に掲げた料理の内、コールド・サーマンを使ふ場合には、すべて鑵詰の鮭を代用しても宜しいのです。併し鑵詰と云ふものは外部から見て其内容の良否がわかるものでなく、又鑵詰の方法等すべての點に誤りなきものを得んとせば、信用ある製造所から出たものを選ぶの外、仕方がありません。ブリキ鑵に純粋の錫を用ゐたのは宜しいが、鉛をふくんだものが酸化すれば健康に害があります。目下國家の爲出征して居る兵士達は、ヨシ石の交つた鑵詰は食はされずとも、是等の點に於て多くの缺點あるものを與へられ、砲彈以外の害を受けつゝあるかと思へば、實に氣の毒に堪えぬ次第です。

以上述べました料理は啻にサーマンのみならず、少しの手心を用ふれば、之を他の魚類にも應用し得られるので、讀者諸君は此話を參考として種々の魚料理をお試みあらん事を望みます。

* * * * * * * * *

新夫婦の別居に就て

前號の『嫁と姑』論中に於て、予は少し斗り新夫婦の別居に關する卑見を述べて置いた。其後予の友のある者、或は實際其局に當つて居る二三の細君は、是非共別居の事に限る、と云つて居る。

予は別居に反對したのでない。要するにこれは人性上の問題である。若しも人類老若の間に、嗜好、趣味の調和がどうしても取れぬとか、又は老夫婦なる個體と、若夫婦なる個體とが理窟上絶對に相容れぬと云ふ(研究の結果)事が發見せられたならば、それはもう別居する方が宜しいに違ひない。併し乍ら、予にあつてはまだそこ迄に人間相互の關係に於て絶望して居らぬ。小自我を忘るゝ代りに、大なる愛の光に依つて安心立命し、積極にも消極にも只この光を以てお互に相對したならば、兩夫婦間の圓滿は必しも期し得べからぬにあらずと信ずる。

尤も予はまたかう云ふ事も考へて居る。若し金錢に餘裕がある人ならば、何も好んで一所に居ずとも宜いかも知れぬ。好んで一所になり、そして猜疑、誤解、反目、憎惡、其他あらゆる淺ましい劣性を互に鬪わすには及ぶまいと思ふ。(清山)

余の霊は眼を覺ませり。今日が日より余は心に抱きて要ふる所のものは、即ち余が後半生を如何にすれば、清く高く人情的に送り得るや、唯これのみ……

在米　K　N　生

○

記者足下。

生は生の家庭に於て兩三日前記者の判斷を煩はしたき一つの事件を醸したり。暫らく笑を忍んで聞き玉へ。

生は過日銀座街を散歩せる際、ある呉服屋の店頭にて柄の如き絣の反物を見たり。其時ふと生の頭腦に浮びしは「これを妻に着せたらばどんなに似合ふだらう」と云ふ考へなりし。依て、歸宅後一番嬉しがらせんものと、其事を妻に話したるに、意外にも彼女は一向乘氣にならず、澁い顔して如何にも冷淡なる態度をなすなり。若し生にして外發的短氣の情を持つものならんには、刹那横面の一つもくれて、「いやならよせ」と云ふ捨臺辭一つ、小料理屋へでも行つてやけ酒を飲む位がおちなりしと云ふべし。生は不幸にも内訌的の性なる故、此塲合、只僅に不平の色を見せつゝ妻の部屋を引上げたりと思召せ。

後にて思ふに、これ彼女の性格なり。普通の女なれば其心を奢侈に傾るに何等の苦心に要せさゝるべし。啻に苦心が不要なる斗りでなく、先樣より如才なく鎌を掛けるが本來なり。而して、彼女には此點なし、即ち身をかざるなど云ふ强き慾念のなき女なるなり。

生は質の處、多少この種の慾念を持てる女を好むなり。故に其塲合「あら、さう、早速着たいわ。買つても好いこと。」位云はるれば、生の大に滿足する處とす。又勿論愉快を覺ゆ。畢竟嬌えらるゝが一種の趣味なり。

記者足下、これを健全なる理性の光に照らさば、孰れが是にして孰れが非なるべきや。生は道德的又は世渡り的に於て大に妻の人物を喜べども、情に於て、即ち嗜好上甚だ不快に堪へざるなり。調金に多少の苦みはありとも、實は嬌えらるゝの快さに比ぶる能はず。

此嗜好の價値如何。

△　△　△　△

◎右に揭げた料理の內、コールド・サーマンを使ふ場合には、すべて鑵詰の鮭を代用しても宜しいのです。併し鑵詰と云ふものは外部から見て其內容の良否がわかるものでなく、又鑵詰の方法等すべての點に誤りなきものを得んとせば、信用ある製造所から出たものを選ぶの外、仕方がありません。ブリキ鑵に純粹の錫を用ゐたのは宜しいが、鉛をふくんだものが酸化すれば健康に害があります。目下國家の爲出征して居る兵士達は、ヨシ石の交つた鑵詰は食はされずとも、是等の點に於て多くの缺點あるものを與へられ、砲彈以外の害を受けつゝあるかと思へば、實に氣の毒に堪えぬ次第です。

以上述べました料理は啻にサーマンのみならず、少しの手心を用ふれば、之を他の魚類にも應用し得られるので、讀者諸君は此話を參考として種々の魚料理をお試みあらん事を望みます。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

新夫婦の別居に就て

前號の「嫁と姑」論中に於て、予は少し斗り新夫婦の別居に關する卑見を述べて置いた。其後予の友のある者、或は實際其局に當つて居る二三の細君は、是非共別居の事に限る、と云つて居る。

予は別居に反對したのでない。要するにこれは人性上の問題である。若しも人類老若の間に、嗜好、趣味の調和がどうしても取れぬとか、又は老夫婦なる個體と、若夫婦なる個體とが理窟上絕對に相容れぬと云ふ（研究の結果）事が發見せられたならば、それはもう別居する方が宜しいに違ひない。併し乍ら、予にあつてはまだそこ迄に人間相互の關係に於て絕望して居らぬ。小自我を忘るゝ代りに、大なる愛の光に依つて安心立命し、積極にも消極にも只この光を以てお互に相對したならば、兩夫婦間の圓滿は必しも期し得べからぬにあらずと信ずる。

尤も予はまたかう云ふ事も考へて居る。若し金錢に餘裕がある人ならば、何も好んで一所に居ずとも宜いかも知れぬ。好んで一所になり、そして猜疑、誤解、反目、憎惡、其他あらゆる淺ましい劣性を互に鬪わすには及ぶまいと思ふ。（清山）

妻の微笑

竹貫佳水

珍らしく仕事が早く片付いたので、太陽のある中に家に歸れば、妻はいそ〳〵喜んで、何や彼や談しかける。我は妻に限らず、人の機嫌の好い顔を見るのが、何より心樂しいのである。

久し振りの家内の景色と、洋服の鈕を外しながら椽に出て見ると、借家の庭の狭い〳〵片隅に、見事に花を持つた銀丁子が、此間までは確に見受けなかつた小さな銀丁子の木が植つて居る。不思議に思ひつゝ何がなゝにそれを見て居ると、妻は傍から、好いでせう貴郎と云ふ。如何したの？と問へば、答へて、お隣から戴いたので御座います。お床に生けました餘りを、捨てるのも何と思ひまして、今挿したばかりの處で御座います。ホヽヽ、御覧遊ばせ、彼の此方の大きいのが貴郎、彼方のが妾の、中央の小さいのがお腹の坊の……

……と打興じて語る。

我は妻の此言葉を聞いて、覺えず戰慄したのである。

嗚呼、可憐なる妻よ、汝は未だ世の恐しさを味わぬかよ。世は汝が思ふほど樂しいものでは無いぞ。汝我に嫁してより、幸にして我に未だ金錢上の失敗、今日喰ふに困ると云ふやうな失敗は無かつた。外面から見れば先づ好い方であらう。が、併し、我の心の失敗は既に幾度であつたか、水臭いと云ふか知らぬが、我は之を最愛なる汝にも告げずに、獨りで何時も苦しんで居る。我の心は此幾度かの失敗に怖氣が付いて居るのである。其矢先に卜ひのやうな挿木を爲て、若しも其中一本でも枯れたら如何する!? 浴衣一枚拵へて遣ることの出來ない我でも、今死んだら困るであらう。我は汝に萬一のことでもあつた日には、最早世に出て惡魔と戰ふ勇氣は無い。我は汝と、未だ生れぬお腹の坊とを便りにして、朝早くから夜遲くまで働くのである。

三本の丁子の木よ。願はくは健全であれ、能く根付いて吳れ、風もあらう、雨もあらう、雪もあらう、左樣なことに負けるな、弱るな、枯れても死ぬな、丁子の木よ！おう、それ、丁子の花は、萎んでも落ちず固つて實になるとか、好き辻占よ、我等はその如き鬪太い心を持つて世に處して行かうよ!!!

悟つて見れば何でも無いこと、春の日は傾きながら麗かに、丁子の花は香氣幽しく、妻は樂しげに打ちほゝ笑むのである。

福田（舊姓景山）英子女史著

妾の半生涯

再版出來

表裝頗る美麗　著者寫眞入

正價卅五錢　郵稅六錢

▲明治十八年大井、小林、新井等の朝鮮事件に參加し一少女の身を以て進で政客老士の間に周旋し、大に婦人本來の能力を發揮して其天職を世に示し依て以て男尊女卑の陋習を打破せんと企てし景山英子女史の英名は今も尙ほ世人の記憶に新たなるべし、女史は蓋し理を以て導く代りに事實を以て證明し、奇道によりて一擧に功を收めんとしたるなりき、不幸事志と違ひて空しく不遇の人となり、多血多恨の性は事に觸れ、物に觸れて感慨湧くが如く遂に筆を執りて人世を敍し世態を論じ、或は當路の失政を批難し或は所謂志士政客の內幕を指摘し忽ち戀愛を說き夫婦を說き家庭を說く、本著即ち是れなり、端を女史の家庭に起し局を社會主義の爲めに瘁しつゝある今日に結ぶ、其間寺小屋あり政談演說會あり故郷の墓詣、東京の裏店住居あり扱は壯士合宿の梁山伯となり爆發物搭載の船となり酒樓の高會となり獄中の呻吟となり恑奇變幻殆んど應接の暇なく而して人物には華族あり辯護士あり乞食あり獄吏なり、女豪傑あり俳優あり凡そ女史の遭遇せるあらゆる階段の人物を寫實して紅綠夾雜また配合の妙を盡せり舊時の政點を知り所謂志士を知り人情世態の變遷を知らんと欲する者は委く此實歷にして小說よりも奇趣ある本書を讀まれよ。

賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂

大阪市東區備後町四丁目　吉岡平助

中付二

教育ある淑女達に是非共一本を勸め參らす

棚橋絢子先生 嘉悦孝子先生共著 （新刊）

空前の家事書

新案日用家事讀本

上下二冊完備

最も嶄新なる趣向と最も明快なる文章とを以て最も進歩したる家事上の智識をあらゆる女子に與へんが爲めに棚橋嘉悦兩先生が苦心協力の餘になれるもの本書なりこれを教科書とすれば教師に勞少くして生徒に利益多く、これを女學生諸君の參考書とすれば百冊の家事書を讀むにも勝り、これを一家に備ふれば家庭は常に平和にして春の如くならん

上等總クロース金銀文字入定價金各六十錢郵稅各金六錢

（萬朝報評）

上篇は章を分ちて家庭生活食物住居の四とす▲家庭の章には家庭とは如何なるものなるやを述べて主婦より僕婢の心得を說き▲生活の章には衣服調製法染色裁縫保存法等を說き▲食物の章には食物と人體との關係より諸種の料理及び食器の事▲住居の章下には家屋建築に對する注意裝飾及び耐久の保存法を說けり▲文章は通俗平易を主としたれば普通の智識ある婦女子には容易に了解せらるべし▲理想的家庭を作らんとする者の絕好教科書なれば中等以上の家庭は宜しく一本を備へて可なり、（下略）

元日發賣家庭書類

料理節用 **家庭曆**

附錄實用化粧法◎日用賄帳

總クロース美本金文字入銀模樣定價三十五錢郵稅六錢

廣津柳浪新作 **をとこ氣**

總クロース美本口繪木版金銀刷表紙艷麗無比定價六十五錢郵稅八錢

黑法師新作＝春汀畫 **新細君**（婚禮五卷）

總クロース美本金銀刷表紙定價五十錢郵稅六錢

草村北星新作＝春汀畫木版美人 **相思怨**（大好評第三版）

總クロース美本金銀刷表紙定價七十五錢郵稅八錢

發兌元 東京市京橋區尾張町一丁目一番地（電話新橋二五八六番） 隆文館

中付四

書翰集

六通の書翰、文字は簡單なれど、そこに云ふべからざる妙味があります。年末多忙の際にも係らず、記者の乞ひを容れて曲げて此書を寄せられたる諸兄に對しては、深く御禮を申し述べます。

○

渚山君足下。正直に白狀すれば、僕は此頃、家庭、家庭と云ふのが少しく厭になつた。

元來、此の家庭、家庭と云ふ聲の高くなつたのは、疎狂なる豪傑連と放縱なる道樂者とを抑へんが爲であつたのだ。然るに今や家庭論が社會の表面裏面に吹き遍き、と同時に、こゝに又家庭趣味の餘弊が現はれかけて來た。

其餘弊とは何ぞ。曰く、小さなる安逸を貪るの情、徒らにケチ〳〵したる錢勘定の考。

非社會的、非交際的の傾向、其他引込思案、籠城主義、只我れ善かれの人かまはず主義、一轉しては嫉妬ともなり、虛飾ともなる個人主義、凡そ是等の趣味感情か、家庭といふ小城廓の中に醱酵しつゝあるかと思ふ。是れが即ち僕の厭に感ずる所であるのだ。

僕が家庭に對して深き趣味を感ずるのは、そが浮世の競爭から離れて、聊さか將來理想社會の片影を現じて居るからである。即ち其の社會的にして、共產的にして、博愛的にして、美的にして且つ詩的なる所が嬉しいのである。而して、今の世に在つては、此の美しき家庭を中心として、其理想の光を八方に輝かして、此の暗黑醜惡なる社會を照す事を勉めねばならぬと思ふ。

一言にすれば、家庭は愛他心を養ふべき處である。然るに今の謂はゆる家庭論の結果は、或は反對に利己心を煽揚しては居らぬかと思ふ。利己心の發現たる家庭には、僕は足踏みをするも厭だ。

堺　枯川

○

渚山兄足下。

何が心地が好いかと言つて、豫定した其の日の仕事を成し遂げ得て、更に新らしい希望を以つて翌日の昭

光の前に立つた時ほど、心の快活を感ずる事はあるまい。然れば又、何が心地が悪いかと言つて、豫定した事の半分もでき無いで、空しく翌日となつてしまつた時ほど、面白からぬ事は無い。毎年此の面白く無い方で正月を迎へるので、畢竟之れは自己の力不相應な豫定をするからであらうと思つて、去年の歳旦に書きつけた豫定は、餘程其の加減をして置いたのである。處が今になつて見れば、何時に變らぬ面白くない方の歳末年頭の感、考へれば倩々自分の身が厭にもなつた。言ふまでも無い、日々年々全く自分の努力が足らなかつたのである。嗚呼こんな事では、一代の事業など〻いふことは思ひも寄らぬ。自分一人のことでさへ斯うだのに、何うして自分以外に努力ができやう。え〻！此の惰け者め、自ら叱咤して今年こそは必らず豫定の如く行り遂げるぞと、堅く誓つて自分は此の新しい歳旦を迎へる。何時でも同じやうな事を言つてるでは無いかと笑ひ給ふな。眞率な歳旦の感を述べよとならば、之れより外に言ふことは無い。生活の眞意義は努力では無いか。努力あつて始めて人生の趣味が認められるのでは無いか、人生に趣味を求めんとすれば、一に努力に因らねばならぬ。努力に鞭つ此の歳旦は、決して世の不幸なものでは無いと信ずる。

青山にて　黒田湖山

○

一生の趣味はドコと云ふことなく、一生の全體にあるものと存じ候。例へば旅行の趣味、面白味は門を出てから歸るまでの間、全體にあると同様かと存じ候。單に過ぎし時代の面白かりしことを思ふて、コレからの面白味に希望を置く能はざるものは、未だ人生を解せざるものなるべし。又新たなる年を迎へんとするに際して、小生は一層深く此の事を感じ居り候。

西川光次郎

○

渚山兄足下。

小生が東京に轉居しましたのは、去年の五月でしたので、都會の生活も既に八ヶ月程になりました。以前

居ましたる大和の曲川と云ふのは、奈良から五六里餘も距つた邊僻の在所で、人家と申しても僅か數十軒に過ぎない、至つて閑靜な村落でした。其頃は家内と唯二人の暮しで、小生の他出中は洵に淋しくつて困ると云ふ訴へをたび／＼聞いたのでしたが、五月に當地に來てからは八月には出產を致し、只今ではあべこべに子供の世話に忙しくつて／＼困つて仕舞ふと云ふ訴へを聞くことになりました。

渚山兄、若し足下でしたら、どちらの訴へを聞く方が好いと思ひなさるか。

初めての都の新年を親子三人にて迎へて

安藤兎毛喜

○

親愛なるわか友よ。

余は余自身にて不思議の感に堪へざれども、着米後一年を經ざる今日に於て、余の精神は既に急激なる革命を起したり。

ある淡き星の夜なりき。余は獨り（ステッキを友とし）憂愁の身を運びつゝ郊外に出でぬ。忽ち、天地は開け、涯しもなき原野は漠々として余の眼前に展開せり。そこに人影なく燈火なく、犬の聲も鳥の羽音もまた耳には達せず。余は終に流罪の人となれりしにはあらじかと疑ひぬ。余の情緒は直に荒らかなれり。何時しか余の身躰は草の上に仆されたり。而して熱き淚は滂沱として下るなり。吁々余はそれ何物なるぞ。悠々たる宇宙の間に漂浪せる、悲しく果敢なき一孤兒にはあらざるか。兄も知れるが如く、余は不幸にも富家に生れて幼時より靈的自覺の境に入るの機會なく、理想は亡びて身は早くも墮落の最下層に沈淪したるなり。余は父母の愛を知らず。兄弟の情を知らず、婦女の神聖なるを知らず。而して最後に神の惠を知らざりき。回想すれば、余が少年時代と青年時代の數年が程は、實に汚れたる肉慾の生涯にてありしよ………（略）

余が其星の夜の大自然に接して默示されたるところはこれなりき。然れどもわが友よ。幸に安んじ玉へ。罪の生涯は余の不明なりしが爲なり。余は救はれたり。

余の靈は眼を覺ませり。今日が日より余は心に抱きて要ふる所のものは、即ち余が後半生を如何にすれば、清く高く人情的に送り得るや、唯これのみ……

在米　K　N　生

記者足下。

○

生は生の家庭に於て兩三日前記者の判斷を煩はしたき一つの事件を醸したり。暫らく笑を忍んで聞き玉へ。生は過日銀座街を散歩せる際、ある呉服屋の店頭にて柄の如き絣の反物を見たり。其時ふと生の頭腦に浮びしは「これを妻に着せたらばどんなに似合ふだらう」と云ふ考へなりし。依て、歸宅後一番嬉しがらせんものと、其事を妻に話したるに、意外にも彼女は一向乗氣にならず、澁い顏して如何にも冷淡なる態度をなすなり。若し生にして外發的短氣の情を持つものならんには、刹那横面の一つもくれて、「いやならよせ」と云ふ捨臺辭一つ、小料理屋へでも行つてやけ酒を飲む位がおちなりしと云ふべし。生は不幸にも内訌的の性なる故、此塲合、只僅に不平の色を見せつゝ妻の部屋を引上げたりと思召せ。

後にて思ふに、これ彼女の性格なり。普通の女なれば其心を奢侈に傾るに何等の苦心に要せさゞるべし。啻に苦心が不要なる斗りでなく、先樣より如才なく鎌を掛けるが本來なり。而して、彼女には此點なし、即ち身をかざるなど云ふ强き慾念のなき女なるなり。

生は實の處、多少この種の慾念を持てる女を好むなり。故に其塲合「あら、さう、早速着たいわ。買つても好いこと。」位云はるれば、生の大に滿足する處とす。又勿論愉快を覺ゆ。畢竟嬌えらるゝが一種の趣味なり。

記者足下、これを健全なる理性の光に照らさば、孰れが是にして孰れが非なるべきや。生は道徳的又は世渡り的に於て大に妻の人物を喜べども、情に於て、即ち嗜好上甚だ不快に堪へざるなり。調金に多少の苦みはありとも、實は嬌えらるゝの快さに比ぶる能はず。

此嗜好の價値如何。

△　△　△　△

雪の一夜

小林蹴月

雪のいと降りしきる一夜、お琴は倩々と我身の將來を考へに考へ盡したのである。

ア丶、寧その事思ひ切て、實家へ逃げ歸つて了ふが優しであらうか？

イヤ〱私は縱しそれまでの因縁と斷念めも爲やうが、甚麼してマア此兒を……只ッた一人の此兒を、見ず知らずの他人の手に掛けさする事が出來やう。

お琴の眼には、何所の間にやら既う一杯の露が宿して居た。側に寐た兒の齡は、漸う三ッか四ッのいたいけ盛り、黒天鵞絨の襟のかゝつた八反の小夜着へ温かさうに包まれて、すや〱と好い心地さうに睡つて居る顏色を見ては、鬼でも抱き上げずには居られまい。

とは云ふやうなもの丶、旦那樣が今日此頃の御不機嫌！ともすれば、出て行けがしのお面色ばかりか、私が一寸勝手へ立て行た間にさへ、お袋さまと何やら斷續なしの狐鼠々々話は、云はずとも知れた私が身の上。それでその上に、今夜は今夜で……。

云ひながら、お琴は棚の上の置時計を眺めて、吻と一息。

何れは亦、此雪を托けに、新橋邊りの小待合で、先達て不圖紙入の中からお落しなされた歌之助とやら云ふ小さな金摺の名刺の主と、新猫とやらのお娛み……？左もない所で、梅村樣のお宅へでもお寄りなされて、四季のお花見位が落であらうが、それも旦那樣お一人の御放埒なら、まだ〱辛抱の爲甲斐もあり、何時かは一度迷ひの夢のお覺遊ばす時節もあらうけれども、お怨めしいはお袋さまのお心！遂ひぞ一度旦那樣に對つて、小叱らしいお話さへ被仰つた事なく、悉皆和女の仕向がわるいゆゑぞと、被仰らぬばかりのお氣態を遊ばして、此兒が時ならぬ泣き聲までも、仇の兒で丶もあるかのやうなお腹立。そりや最う私は、元々赤の他人に違ひなければ、憎いと思召すのも詮方なけれど、此兒はマア眞實の孫とは思召さぬのであらうか。それ

とも又、此兒を生んだ私が憎いゆゑに、孫までも憎う思召すのであらうか。それならば何故、此兒を生ませた旦那様も憎うは思召さぬのであらう。内のお袋さまに限つて、緣日の歸りに風車一個買て來て下された例もなければ、眼上に被さつて居る頭巾を一度直してやつて下された例もないのは、いよ〳〵小兒と云ふものがお嫌なのであうか。孫は子よりも可愛いと云ふ昔からの言ひ慣はしもある世に、甚麽して内のお袋さまばかりは、彼樣したお心でお在遊ばすのであらう。

お琴は胸先を支へ居たる兩手を投げ出すやうに膝に落して、同時に蒼白き額にいよ〳〵深き八の字を刻んだ。

が併し、何處の世界に眞實の孫が可愛くないお方があらう。内のお袋さまだツて矢張孫は可愛く思召して被在るに違ひはなからうけれども、私が憎い、私が邪魔なと思召すばかりに、故意と心にもない八ツ當りを遊ばして、憎い邪魔な私を困らさう〳〵と遊ばす、云はゞ當座の方便かも知れない。

去て見ると、聞えぬは旦那様、縦ひ嘘にでも稀には、私の心の息まるやうな事を被仰つて下されても好かりさうなもんだに、此夏中、私が病氣のために病院に入つて、一月餘り留守にして歸つて來て以來と云ふもの、それは〳〵がらりと變つた萬事の處置振、今より思へば其頃から既う歌之助とやら云ふ魔性の物に心を奪はれてお在遊ばしたのであらうが、彼の氣むづかしいお袋さまと、此西東さへ辨別のない小兒を、私一人に押付放しの、可哀さうに二年越無事に勤めて居た女中までも御時節柄の儉約と號して國へ還らせ、費用と云ふ費用は、引詰めに引詰めてお置き遊ばしながら、二語目には和女の經濟の取やうが間違つて居るからだと、五厘の銅貨も二枚に剝がして費はねばならぬやうな御無體ばツかり。然らばと云つて、口に云へば叱られ、云はねば世間に恥を晒すが辛さに、實家から持て來た着換の衣服を、又も一枚又も二枚と、隣の村上が婆を嘱んで質屋へ運ばせた數も大抵ならぬに、此苦痛を知らぬが佛いびりでも爲て御座るべき筈のお袋さまが、

それからそれへと氣を回しての陰口とは、何たる情ない事であらうか。それもこれも、嫁姑の仲圓く收まり、夫婦睦じう生活して居らるゝための儉約なら、今夜の雪に裸體で居よと云はれても、出來る限りの辛抱も爲やうに、槍では突かれ、刀では刺さるゝやうな思ひしながら、雨漏る雫を溜るやうに儉約した所で、結局は皆歌之助とやらが魔性の笑靨に注ぎ込む流れの一滴か。四季の花見に嵐と散りゆく木の葉の一片。果は御時節柄の儉約を名として、私までも三行半の憂き目を見るやうな事になりはすまいか。左すれば、今の内に思ひ切て、此方より身を退くのが優しのやうにも………。

ア、、此兒さへなかつたらば………。

ア、、旦那樣さへ、も少しく私を愛して下さる思召しがあつたら………。

ア、、切てはお袋さまでも、も少しく私の心を察して下さつたら………。

ア、、私は甚麼なつても、此兒を見ず知らずの他人の手に掛けさするやうな大膽な女になる事が出來ぬのであらうか。

お琴は我を忘れて、我兒の上に泣き伏して了つた。

その聲が漏れてか、次の室から突然姑どのゝ咳拂ひが聞えた。

お琴は愕いて、泣く音を止めて、アノ阿母さま、お咳が出ますやうなら、お湯なりと持て參じませうか。

姑どのは、それが聞えないのか、但し聞えても默つて居るのか、一向に返答がなかつた。

と、暫時過ぎてから後又、門口の邊で下駄の雪を落すらしい音がコツ〳〵。

お琴は前よりも一層慌しく、且愕いたやうに涙の痕を押拭つて、わざとらしからぬ笑顔を作りつゝ、玄關の方へと急いだ。

暫時して入つて來た旦那樣のお顏はと見れば、宛然苦蟲を嚙み潰した猿のやうで、御當人頗ぶる威風堂々の態度を取て居るらしいにも拘はらず、足元のひよろつき蹣跚が、甚麼も甚だ然でないやうであつた。

この寒氣に何故、もツと火でも起して置かんのぢや。
白痴奴！

先づ御挨拶がこれなのである。

お琴は御時節柄の倹約ゆゑとも答へずに、炭取を引寄せて、默アつて炭をつぎ始めた。それが既う夜明の三時近くであつた。

あはれ東洋に最新の文明國たる我日本國中には、お琴の姑の如き意地わるき姑どのや、お琴の良人の如き無情冷淡なる良人も甚だ多くはあるまいが、蓋し又お琴の如き辛い悲しい境遇に居る嫁女も、二人とはあるまい。

（完）

記者曰く。

『雪の一夜』は流石に老練家の筆で、日本從來の所謂『世話』に於ける嫁氣質なるものが、文字の上に歴々と顯はれて居る。今この小説を讀むで了つた予は、篇中の女主人公に對し、深厚なる同情を拂ふと同時に亦自ら一種の輕蔑の念を抱く事を禁じ得ぬである。

此様な優しい細君と、此様な無情なる夫と、それから此様な意地の悪い姑とに依て、此様な不愉快な家庭が、此新空氣の吹廻す東京の地に組織されて居やうとは、予の今日迄に少しも氣付かぬ處のものであつた。『雪の一夜』の家庭は慥に舊世紀の遺物である。すべて子を産む事の外には、殆んど何等の權利をも持たなかつた昔しの時代に於ては、眞にお琴のやうなお人よしの女がしほらしい嫁女と云はれて居たであらう。而も今日になつては、此しほらしさ、此おとなしさが、却て人の悪感を催される種となる、予は作者が此嫁女をさして**琴子**と云はなんだのを見て窃に喜んだ。いやしくも新時代の教育を受けたものは、此様な壓制な、冷酷な、牢屋のやうな家に、幾ら小供が可愛いからとて、辛抱して居られる筈がない。かの放縦な生理的の情慾も一つよく抑え得ぬ程の意久地のない夫に對し、「それも旦那様お一人の御放埒

なら、また〱辛抱の爲甲斐もあり……」といふに至つては、終に何等の評言をこれに加へて好いやら知れぬ。又、夫の放蕩の結果に產出した貧亡の罪を自分一人に着せられ乍ら、口に出せば叱かられるとて得云はず。終には內證で自分の衣裳を質屋の庫へ通はせると云ふ大慈悲。それで居て、偶々夫の顏を見る時は氣が利かぬとて「白痴め」との畜生扱ひ、世にこれ程の屈辱を眞に堪え得る人があるであらうか。

おとなしいと云ふ躾は美しいには違ひないが、どんな壓制にも屈して居のが果して理想のおとなしさであらうか。おとなしいと云ふ女德の解釋には、今日に於ては多少の新意義が加はつて居る、それは情實に對する理の正しさを認たのである。予はこの見解からして、此小說の塲合に於けるお琴の身の振り方、即ち一身上の處置を如何になすべきかに就いて少しばかり考へて見たい。小說中のお琴は無論不幸な女で、夜每々々の涙に枕紙を濡して老い行くのが彼女の運命であらうが、併し其不幸の身の上を捨てゝ少しも顧ず、益々不幸の募るが儘に任して置かうと云ふのは間違ひである。如何に姑が強くとも、如何程夫が恐くとも、一應正しき道理に照して、主婦の生命たる人權的存在を主張せねばならぬ。そうして其主張は權利である。傲慢でも不遜でも勿論ない。それも己の強き感化力に信賴して、再び良人と姑との良心を呼び戻して見やうと云ふ程の大決心があれば兎も角、さもない以上は早く其身を不幸の渦中から免がれ出る必要がある。夫から、お琴は同時に痛く愛兒の情に引かれて居る樣子であるが、これも思へば餘りに貴い理性を沒し過ぎた話で、此塲合には斷然其樣な未練を棄ねばならぬ。それは、自分一人の不幸が施いて其兒の運命にも禍ひを及ぼすからである。

併し斯ゝればとて、予は何も離婚の實行を無理に強ひやうとて云ふのでない。一つは婦人の權利を重んずるの結果、今一つは婦人の名譽を思ふからであ

る。要するに家庭舊來の悪弊――暴横な主人と無情の姑を根絶しやうと云ふ考へに對しては、お琴の遣り方は餘りに善良に過ぎて寧ろ愚に近い。此場合は同じ性格同志の磨合ひ位の小事でない故、天下の嫁女たるものは正々堂々の陣地に立ち、強き堅き覺悟と勇氣とを以て奮闘せねばならないと思ふ。

（附記）

これに就いては生活と云ふ難件が直ちに生ずる。女子に職業を授ける事の必要は、又直に分つて來る。それで、獨立の生活が出來る丈の藝能を持つて居る女子は、とりもなほさずこれ等の悪弊に對する健氣なる戰闘員であると同時にまた健氣なる勝利者である。

尚ほ參考の爲に福澤氏『女大學評論』中より、此場合に適切な文字を一つ二つ抄録する。

「書中男姪亂なれば諫むべし。怒り怨むべからず。とあれど、夫の姪亂不品行は直接に妻の權利を害するものにして、怒り怨むは必しも嫉妬にあらず。抑も一夫一婦家に居て偕老同穴は結婚の契約なるに、其夫

婦の一方が契約を無視し、敢て婬亂不品行を恣にし他の一方を疎外するが如きは、即ちこれを虐待し之を侮辱することにして、破約加害の大なるものなれば、被害者たる婦人が正々堂々の議論以て其罪を責むるは契約の權利を護るの法にして、固より嫉妬の痴情に驅らるゝものに非ず、但し其これを議論するに聲色を温雅にするは上流社會の態度に於て自然に然る可し。我輩に於ても固より其野鄙粗暴は好まずと雖も、實際不品行の罪は一毫も恕す可からず。一毫も容捨す可からず。之が爲に男子の怒ることあるも恐るゝに足らず、心を金石の如くにして爭ふこと婦人の本分なれ。女大學記者は是等の正論を目して嫉妬と云ふか。我輩は之を婦人の正當防禦と認め其氣力の慥かならん事を勸告するものなり。』

『男尊女卑の習慣は其由來久しく習慣漸く人の性をなして、今日の婦人中動もすれば自から其權利を忘れて自ら屈辱を甘んじ、自から屈辱を忍んで終に自から苦しむ者多し。唯憐む可きのみ。』

所謂「男らしい」といふ詞

前々號には安藤氏の「所謂婦女の情」といふ御説がありました。至極御尤の御説で私共の如き平素人間平等博愛の思想を信じ、生存競爭といふよりも寧ろ相互扶助といふ方面を好んで觀察致しますものは、婦人の德を非常に尊敬致しまするので、特に面白く御説を拜見致しましたので御座います。（やなぎ）

今茲に婦女子の情といふ詞と反對に『男らしい』といふ詞を掲げて、氣が付きました點を少々述べて、御批評を頂きたいと思ふので御座いますが、時節柄で御座いますから、字句の穩かならぬところは充分御訂正を願ひたいと思ひます。

先づ男らしいと申しますと、何となく結構なことの樣に聞えまして、婦女子の情といふ詞とは一寸反對の樣に思はれます。故に男らしい人と申しますと、何となくエライ人の樣に思はれます。今これを分析して申しますれば、第一決斷力のある人、第二勇氣のある人、第三義俠心のある人、第四小事に拘泥せぬ人といふ樣な意味である樣に思はれるのであります。

右の四ヶ條は昔より男らしきことの中で、主なるものとして居つた樣で御座いました。所謂武士といつたものは多く右の資格にかなつた人であつたので御座います。源義經、大石良雄の如き人は、所謂男らしき人の標本として常にもてはやさるゝのであります。江戶ッ子氣質といふものも所謂それで、義俠心のある、小事に拘泥せぬところを賞賛するので御座います。

然るに、右の四ヶ條をよく考へて見まするに、必しも常に結構なことには限らない。言ひかふれは、吾人か行爲の標準とはならぬ樣に思はれるのであります。第一決斷力は必要であるに相違ありませんが、常識をはなれて妄りに斷行すると常によいことばかりではありません。第二の勇氣も必要ではありますが、所謂蠻勇となると餘り感服致されません。第三の義俠心といふのも其志が甚だ狹くして、寛仁の德を缺いて居ることが多い。第四のことになると殆んと高揚子主義の考で、經濟界今日の狀態に適應せざる樣に思はるゝのであります。

右は固より男らしいといふ詞を、近來普通に用ひらる丶意味に解釋したつもりで御座いまして、尙一歩を進めて申しまするど、偏愛の思想甚だ強くして、博愛の思想は全くない。自負心が甚だ多くして、謙讓の德は殆んど缺けて居るといふことが、現に男らしいといふ人の行動に於て歷々表はれて居る樣に思はれるのであります。又側面よりこれ等の人の家庭を觀察致しますると、其理想とするところが甚だ劣等にして、偏愛の情強く、自負心及殺伐の氣風に富で居ることが、其子弟の行動にあらはれてあさましく感せられます。是れ即ち婦女子の如くなること勿れ男らしくせよといふ家庭の敎訓が、自負的、殺伐的、偏愛的の意味を以て行はれて居る爲めに生する結果で御座いましよう。此樣な家庭に於ては、源義經大石良雄の如き人物を最高の理想として居るので、其雇人に對しては辨慶、寺岡の如くならんことを望み、婦人は凡べて先代萩の政岡の如くありたいと欲するので御座います。故に平等博愛の思想などは全く見ることが出來ませんので、恰も封建時代の如く階級的服從の思想が充滿して居るので御座います。誠に氣の毒な有樣であります。

右の如く申しまするど、男らしいといふ詞はあまりよい詞ではない樣に聞えますが、然しそれは詞が惡いのではありませんので、これを用ふる人の思想が惡いのだらうと思ひます。封建時代の階級的殺伐的の思想を以て、この詞に意味を附するのが惡いのだらうと思ひます。正義の如何を識別せずして、只譯もなく勇を揮ふのは服しがたきが如く、男らしき行を爲すにも、亦正義のあるところを識別してか丶らねばならぬこと丶思はれます。言ひ換ふれば、自負偏愛の思想を棄て丶、人間平等博愛の思想を取り世の毀譽褒貶に動かさる丶ことなく、一心に神の正義を信じ、勇往邁進するものでなければ男らしき行爲といふことは出來ぬと思ふのであります。これでこそ始めて男らしいといふ詞の眞義にもかなうことであらうど存じます。

今日は男らしいといふ詞を好む人が甚だ多い時節柄で御坐いますから、どうか此詞に進歩せるよい意味を附して、廣く用ふる樣に致したいと希望するのであります。

お籠の林檎（小供に聞かせる話）

枯　蓮

正月も元日の事で御座います。あまりお天氣が好う御座いましたから、ぶら〳〵上野の公園を散歩して居りました。

すると、嬢様や、坊様方のうれし想な事。まあ姉様に手を曳かれて、動物園の方へ入らつしやる方もあるし、お父様に連れられて、博物館に這入て行く方もあるし。そうかと思ふと又。「母様！これから、浅草の觀音様へ連れて行つて頂戴な、ねー。母様!!」などゝ、切りに、母様にねだつて居らつしやる、嬢様方もあるし。まあ様々です。何にしろ、冬の内からもう幾つ寢ると〳〵と、指折り數へるのが待ち遠ふでならなかつた今日の事ですから。何處を向いても小供の顔は平常よりか、にこ〳〵して見へました。

私は暫く、樹の陰へ這入つて、休息で居りました。すると、私の前を、すた〳〵傍眼も觸らず。通つて往くまことに可愛らしい嬢様を見受けました。

艶の好い房々した髪毛を、紫の「リボン」で後へおさげに結つて海老茶のお袴を穿いて。

おや〳〵まあー。お獨りで、何處へお出になるのかしらー。と見送つて居りますと。其嬢様はお佳味想な林檎の籠を、優しい手に提げて。動物園の際から横へ這入つてお出なさいます。

私は考へました。多分お庭に出來た林檎を、お伯母様か又は、姉様のお家へ届けにいらつしやるのだらう。

斯ふ想いましたので、何の氣無しに、後について往きました。すると、其お嬢様は天王寺の中へ這入つてお了いなさいました。

私も一所に、其廣いお墓斗りある所へ來て了いましたが、先の嬢様は、何か、彼方此方切りに探がして居らつしやいます様ですから、私は不思議に思つて、

「もし〳〵。お嬢様！何を探がして居らつしやるのです」と、お尋ね致しましたら。嬢様は「につこり」笑つて

「妾ー、御友達のお墓を、探がして居るんです……」

と斯ふおつーやいました。

私は大層感心しました。今日はお正月で、公園だの芝居だのと、各自面白想に遊びあるいて居らつしやるのに、此の嬢様は態々お友達のお墓參りに、お出でなすッたんだ。と斯ふ考へ付きましたので、私も如何か早く、目付けて上げたいものだと思つて、

「もし、嬢様！お友達は何時頃お亡りなすつたのですか。新しいお墓でせうか古いお墓でせふかー。」

と斯ふお尋ね致しました。

すると嬢様は、「そーねー。丁度三月斗りまへ……」と仰有つた。

私はそれでは、まだ新しいお墓に違い無いと思ひ、彼方此方見廻しました。すると、ずらつとむこうの方に、まだ生々しい白木の墓表が見へましたので、

「もし、嬢様！あれぢや、御座いませんか……」

と指しますと。嬢様は思出した様に、

「あゝ。そーでした……」

と、駆け出して、其お墓のそばへ行きました。そーしてしばらく、悲し想にあたりを見廻して居ました。

まことに、無理のない事です。

白い毀掛つた提燈や、順番く列てある竹筒の花に皆しほれて居ます。

やがて、お孃樣は眞榊の枝から青々とした葉を一つちぎつて、お墓の上に置いてあるお茶碗の水を酌んでは、はら〱とお墓へふりかけておいでゝす、

そうして大事に提げて來た林檎の籠を丁寧にお墓の前に備へ、小さな掌で何度も〱拜(をがん)で居ましたが、其小さな唇は僅に動いて見へました。今此の孃樣は何を云ふていらつしやるのでせふ。

あの白い木には、此の孃樣のお友達の名前が書いてあるのです。そーして、仲のよいお友達は此の淋しい地面の下に、今如何して居らつしやるのでせふか。

つい三月斗り前迄は、一所に手を曳かれ、學校へ行つたり、鞠をついたり、お手玉を取つたり、それは〱仲善しのお友達だつたのです。

暫時して、お孃樣はお墓から出でお出なさいました。併し其時孃樣の顔はまことに悲しさう、涙ににじんだ手拭(ハンケチ)を手に持つて、何度も〱後を振り返つて居られます。

私は靜かに、孃樣のそばに寄つて、

「今迄提て入らしつた、あの林檎は、お友達の處へ持つてお出なさる積りだつたのですか？」

と斯ふお尋ね致しましたら、孃樣のおつしやるには、

「えー、何日(つい)かお約束をした事がありましたから………」

と、こう孃樣はおつしやいました。そーして可愛らしい眼に、涙を浮べて、後を振り返つて居らつしやいました。

吁(あゝ)。私等にも誰にも見へませんが、併し此のお孃樣には今地面の下に居るお友達が、嬉し相に林檎を眺めて居る事が屹度見へたのでせう。母樣は平常(ふだん)如何云ふ事を申して居ますか。お友達と交るのには、いつも、此の孃樣のやうに親切に、そーして、正直でなければなりませんよ。

田園生活

京都　松樹生

田園に居を占めて、都會へ通ふ人はよくあるが、自分はそれの反對で市街の喧噪が之れから始まるといふ午前の八時には、まう屹度傾はしき都門を離れて、太秦のわが牧場へと通ふべく、日々に眺めて見飽かぬ趣味の町端れの田舍途に立つのである。冬枯れの此頃こそ目を慰めるものも少いが、それでも人の氣付かぬ掬すべき自然美を味ひつゝ、藪を横ぎり堤を越えて、大抵九時には閑かな牝牛のモーッの聲に迎えられる。

我が牧場といふのはほんの名のみ、牛は未だ十頭にも充たぬ小數で、慰め半分の樂事業、それに始めてからヤット一年にもならぬので、萬事萬物がお師匠さんの無理もないのであるが、抱負はなか〱大きいのです。

澄み渡る蒼穹の下萬物を育する太陽の光をあびて、額に汗して耕す、牛を放つ、雛を飼ふ、蜜蜂を訪ふ、そして讃嘆する――烈しい都會の生活の響は、こゝへはもう達しない、聞ゆるものは自然の私語、見ゆるものは自然の姿、手に自然と接し、足に自然と觸れ、自然の香を嗅ぎ、自然の息を吸ふて、アゝ田園の生活の如何に平和に幸福であろう！

乍然考へて見れば自然の運命程不思議はない、七年前に優等の成績を得て商業教育を了つた當時には、マサカ牛飼をしやうとは思はなかつた、燃ゆるやうなアンビションを抱いて商海へと押し出たのであるが、今迄の生活、――それは烈しき戰を戰ふたといふとも出來れば成功失敗の何れを得たとも云ひ得ないが――の間に自分は深く自分を研究した、思索した、而して遂に第二の自己に打ち勝つて第一の我にかへたのが此の結果である。で今は如此動物相手の仕事に非常の愉快と溢るゝ計りの希望を抱いてゐる。

ソンナラ何故全然都會を捨てゝ仕舞はないのかと聞く人があろう、それは家族のため、母一人しかない自分の家庭には、都に生ひ立つた唯一人の母のためである。

夕べ夕映えの時めく匂ひの中に、また人と反對に自分は休息の夜の都會へとかえり行く。

筆ついで

此欄には記者の日記、讀者の相談に對する答辯、家庭の消息、三面雜報の評論、社會風俗の觀察記、其他折に觸れたる感想等、いろ〳〵を不順序に思ひ付次第に揭げます。但し問題が大きければ題を改めて他に移きます。

▲戀と事業

戀は少年者のもの、事業は壯年者のもの。戀は淺く、事業は深い。戀に醉ふものは何等の愉快ぞ。しかも、高大なる事業を成就するの快樂には及ぶべくもない。

家庭は戀の住家である。けれどもまた事業の住家となることがある。戀の家庭は平和の相、事業の家庭は壯嚴の相。

かゝるが故に予等が理想とする家庭は、戀と事業を兼ねたものでなければならぬ。

▲日本人の潔癖心

今年の三四月頃の事なりとて、ある人の語るを聞くに、先年大津事件にて露國より勳賞と年金を得たる車夫二人。此度の戰爭起りて以來「最早其樣なけがらはしい金は受取らず」と云ひ居りしに、其後佛國公使の手に半金五百圓到着せしに及び、忽ち意を飜して受領せりとかや。記者は此話を初めて聞いた。當時の某新聞を見ると、これに對して惡口を吐いて居るが、予は寧ろ普通の事であらうと思ふ。自分の勳功と今回の戰爭と何處に何の關係があらう。宜しく公然と其勳功に對する報酬を受取つて可也。これは正しき判斷か直接に命ずる聲である。

但し、車夫の心事は必ずしも賞められぬ。「最早」云々を吹聽したのは、國民の愛國心に媚びたものか、若し然りとすれば陋劣極まる、本心に出たとすれば甚だしき感情的神經質的の見解である。特に世間や新聞の批評も批評、實際の公言を曖昧に附し去つた車夫の心底は憐むべきだが、下附金を受取る事に惡口を云ふの心は何たる見當違ひであらう。これを稱して日本の潔癖心と云ふならば、潔癖心なるものは其實田舍婆さんの頭腦に宿る、かの迷信と同じものになつて了ふ。

▲時間の信用

昨年の日記帳を繰返して見ると、正月頃のある日の記事中に、『家庭に於ける時間的信用』と見出しゝて、斯う云ふ事が書いてある。

「十二時迄に歸らんと妻に約せしが、終に歸宅すれば三時となれり。妻甚だ不興なり。而して道理なり。予が最初家を出でんとせし時、既に其用事の外、二三の友人の許へ立寄らんと云ふ下心さへありし。これ到底十二時に歸り得ざる證據にあらずや。妻は予に云ふ。『僞言を云はずともよろしきなり。』と。實に然り。予は今後ありの儘を眞實に述べる事をせん。而して時間的の不信用を快復せんと欲す。」

予は斯る私事を公にするは、甚だ相濟まぬ譯と思ふが、懺悔の積りにして書抜いたのである。併し今日に於ては、『時間に信用』が稍厚くなつて來た。そうして、右に所謂下心がある時には、明々地に初めから白狀して置く事にして居る。

▲獨合點の嫁貰ひ

函館淸月生なる人あり。舊臘記者に書を寄せて曰く『先月上旬家嚴より(在京都)書あり。親類某の女(余は未見の人)と小生との結婚すべき樣申來る。然るに生は父の意に從ふ能はず。結局如何に決行すれば好きやら、煩悶苦惱致し居候………』(答は次號)

編輯便り

▲新なる覺悟　新年は目出度いが其實今年はあまり目出度くないのです。日本の家は開戰以來如何に多くの父と子息とを失ひましたらう。それのみならず、老父母と弱き悴の妻は、生活の困難に日夜泣きつゝあるのです。吁々生活の困難、世の中にこれ程いやな聞辛い言葉が又とあるでせうか。われ等は一時も早く協力してこのわるい事實を地上から放ち出さればなりません。これを思へば、新年は祝ふべき時でなくして、覺悟を新にする時であります。

▲卷頭の寫眞版　英國畫家エフ、ザー、コトマン氏の作です。この原圖は有名な Nation's Picture 中に、"One of the Family" と題してある物、又その原圖の原圖(即ち實物)はリバプールのウオルカー美術展覽會の樓上に飾られた大形の油畫で、千八百八十年秋の出品であります。記者は日本の各地に散在する讀者諸君の床しい家庭に於て、この和樂に滿々ちた畫が、申合したやうに一つの飾物となる事があつたならば實にく、嬉しいのであります。

▲新刊二種　平民社より木下尙江氏の「良人の自白」堺枯川氏の「理想鄕」とが舊臘相前後して市に出ました。記者はこの二書を玩味して、次號で充分御紹介したいと思ひます。

▲京都の松本氏　の書簡に對しては、次號に多少答ふる所がありませう。

▲二葉園藝、西洋料理の栞　は相變らず、久田氏、綠亭主人の擔當で、懇切に答へます。

▲投書、相談等の原稿　は編輯記者へ直送して下さい。

由分社取次書籍追加

良人の自由

堺枯川抄譯 一冊五錢 郵税二錢

他書と同時に御註文あれば郵税を要せず

理想郷

木下尚江著 一冊三十五錢 郵税不要

恭賀新年

由分社
小林助市
小林保子

恭賀新禧

『家庭雜誌』編輯部

家庭雜誌第貳卷第拾貳號目次

三十七年十二月二日發行

家庭用としての書籍

椿井時雄君序　松尾音治郎君著
◎明治心學通話　定價四十錢　郵税四錢

コメギース著　元田作之進君譯
◎倫理初步　定價二十五錢　郵税四錢

松村介石君著
◎婦人のかゞみ　定價三十錢　郵税四錢

フレザー氏著　成瀬四壽子譯
◎實用看護法　定價五十錢　郵税六錢

萬朝報記者松居松葉君著
◎御伽草紙　定價三十錢　郵税四錢

女子大學教授　松浦政泰君編
◎歐米家庭德育佳話　定價五十錢　郵税六錢

◎歐米家庭美譚　定價三十五錢　郵税四錢

奥村多喜衛君著
◎新美人法　定價二十五錢　郵税四錢

◎成功の生涯　定價二十五錢　郵税四錢

青年を鼓舞作興し、青年を訓誨し、青年に出世の道を敎ゆるは、偉人賢女の生涯と其活ける感化力より大なるものなし、而して此書は成功せし古來の偉人賢女の實歷に考へ、其精神其品格を修養するに偉大の裨益あるものを撰者したるもの、題して成功の生涯と云ふ、眞に詐らず。

米國スミス夫人著　菅沼元之助君譯
◎家庭教育　定價十五錢　郵税二錢

將來父たるべく、又母たるべき人々は、此書によりて如何に子供を教育すべきやの方針と方法とを供せらるべし、蓋し、兒童教育の眞意義、眞精神を鼓吹するに於て此書は當今他に比類なしと信ず。

綠岡隱士著
◎母と妻　附錄　交際の栞　定價二十錢　郵税四錢

專ら事例を泰西諸國に取り、母及び妻に對し、新時代の要求に應ずべき資格を敎へ敎訓を與へたるものなれば、世の母たり妻たるものは勿論、家庭及婦女問題に興味同情を有するものにも、多大の參考を供するなるべし。

◎少女　定價二十五錢　郵税四錢

「不安なる處女の境遇」あり、「教育の定機」あり、「女子と愛情」あり、「老處女」あり、「書籍の撰擇と其影響」あり、「読書法」あり、「カザリンとアンナガーチー孃」あり、「ミトフオルド孃」あり、「ウヲルヅウヲルスと其妹」あり、「カロリンハーステエル孃と其兄」あり、「少女の社交的心得」あり、累編二十六、皆是れ著者胸臆の最奥より、流れ出でたる同情の滴にあらざるはなし、

發兌　東京市京橋區尾張町　警醒社

堺枯川抄譯（平民文庫五錢本）
井リアムモリス著

理想郷

ベラミーの新社會は經濟的で、組織的で社會主義的であるがモリスの理想郷は詩的で、美的で無政府主義的である、新社會と理想郷とを併せ讀まば、人類將來の生活が髣髴として眼前に浮ぶであらう

十二月廿五日發賣

▲定價五錢、郵税二錢▲但し二部以上或は他書と同時に御注文あれば郵税を要せず▲猶配布用としては一圓につき廿五部、二圓につき六十部、三圓につき一百部を送る（新社會と同形）

發行所 東京市麹町區有樂町三丁目 平民社

木下尚江新著（十二月二十日發賣）

小説 良人の自白

定價卅五錢 郵税不要

曰く有夫姦、曰く有婦姦、是れ勿論人生の最大罪惡也、然れども社會は之を制裁するに當て先づ無愛情の結婚てふ根本的罪惡を批判せざるべからず、否、根本的罪惡を强要せる社會自身を猛省せざるべからず、

『良人の自白』は即ち明治社會の懺悔なり

小説 火の柱（四版）

社會主義者として、新聞記者として、辯護士として、演説家として知られたる木下尚江氏の文壇に於ける處女作は即ち是

發行所 東京市麹町區有樂町三丁目 平民社

大賣捌 東京 上田屋 北隆館 東海堂 東京堂 良明堂 中庸堂

恭賀 ● 輕便 瓦斯の煮燒 德用 ● 新年

瓦斯は燈火用の外料理其他一般の煮燒用として使用は輕便マッチ一本あれば晝夜何時にても即時に用を便じ火力加減自在にして火災の危險なく且大に手を省き費用は薪炭よりも低廉なり

○三升の米は瓦斯代僅に一錢七厘時間十六分にて炊くを得べし

○瓦斯竈は本社の發明品にて專賣特許を得たるものにして瓦斯消費量少なく德用便利也

○工事費は前金拂は一割引とし又月賦拂にて約定す

○臺所竈、七輪、湯沸、風呂並煖爐等に專用の瓦斯代は特に定價の二割引とす

尙各種式新器具は當社構內陳列所又は銀座陳列所さへ陳列縱覽に供居候御立寄御一覧被下度候



東京 神田 錦町

東京瓦斯株式會社


謹賀新年
御用諸學校
TRADE S.A MARK
ANDO-SHOTEN
No. 5. Urajimho-cho. KANDA. TOKYO.
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
改良ロンテニス二重枠ラケット一組
一號品 一二、五〇〇
二號品 一一、〇〇〇
三號品 八、八〇〇
四號品 七、四〇〇
五號品 六、七〇〇
六號品 五、七〇〇
七號小學用 四、七〇〇
八號婦人用 六、〇〇〇
九號婦人用 七、〇〇〇
体育用品
S.A. 安藤商店
東京神田裏神保町五
電本 484
ピンポン室内テニス
一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
號外同 〇、八八〇
改良テニスネット
一號一張四間半 一、七五〇
二號一張五間半 二、二五〇
三號一張六間 二、四五〇
四號一張七間 二、九五〇
ゴム入フートボール
二號一個 四、〇〇〇
三號同 四、五〇〇
四號同 五、〇〇〇
五號同 五、五〇〇
六號同 六、〇〇〇
七號同 六、五〇〇
八號同 七、〇〇〇
體操遊戲器械一切
東京神田裏神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四

後付五

謹賀新年

全生病院 木澤敏

麹町區土手三番町十番地
（電話一〇九〇）

外科皮膚病
梅毒 痔瘻 外科的婦人科 尿道器械的療法

診察 午前九時より十二時まで

東京 加藤病院
新橋際 出雲橋

院長 獨國醫學士 加藤時次郎

分院 横濱神奈川臺。火木土午後三時至六時
小田原海岸 毎月曜午前中

東洋內科醫院
東京神田區駿河臺鈴木町二番地（御茶水橋畔）

電話本局八八八番 一三八五番

院長 醫學士 高田畊安

診察 毎日午前但日曜日及大祭日休業、入院診斷隨時應需、木土曜、窮者施診○病室增設落成

南湖院
神奈川縣相州高座郡茅ヶ崎海濱（停車場所在）

副院長 醫學得業士 林止

診察 院長出診土曜日午後、副院長診察毎日午前、但日曜日大祭日休業、入院診斷隨時應需、土曜日午後施診

高田病院施診所
東京麹町區三番町三十番地（市ヶ谷停車場附近）

主任 醫學士 松田三彌

診察 毎日午前、但日曜大祭日休業、窮者ニ施[illegible]名及生法ヲ示シ處方箋ヲ與フ○往診應需


新年之御慶
目出度申納候
明治三十八年一月
追て弊店儀は元三井呉服店の
組織を相更め候ものに有之自
今一層事業を擴張し漸次種々
の新設備を施して益御便利を
圖り可申候間不相變
御用命の程奉願上候
東京日本橋區駿河町
三越呉服店
電話本局
特九一一五番
一三一七番
一八五六番
一八六〇番
三三三二番



腦病 靜靖丸 頭痛

腦力を明快にし腦病神經病を全治す

腦病 にて常に頭重く、記憶弱力く、忍耐力薄く、氣鬱ぎ、不眠、頭痛を煩ふ人

神經 症にて僅の事を苦慮し、常に動悸、息ぎれを感じ怒り易く、悲み易く、心弱き人

逆上 症にて常に顔紅く、頭痛、眩暈し、耳鳴目かすみ、肩凝り背重く、便通少なき人

頭痛 症にて學生の常に煩ふ勉學性頭痛、感冒、徹夜、苦慮等より發する者其他總ての頭痛及び頭痛持の人

不眠 神經家又は老人等の夜分安眠を得ざる人、亦は苦慮、悲痛、等にて眠むられざる人

其他常に腦を勞する人及神經家亦は大酒家、肥滿家は持藥として此藥を服用せらるべし腦力を强健にし精神を快活ならしめ、中風、卒中風を豫防する希有の偉効あり、

藥價 〔二日分弱金拾錢　廿二日分(常備用)金壹圓　十日分金五拾錢
六日分金三拾錢　四日分金貳拾錢〕

本舖 東京市日本橋區藥研堀町 藥劑師 高木與八郎

逆上を引下げ睡眠を催し頭痛を即治す

家庭雜誌第一號　明治三十六年四月五日第三種郵便物認可　明治三十八年一月二日發行